
アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM

1999. 11. 30

No. 43



北の地白老に先住民が集う.....
「先住民国際フェスティバル in 白老」の開催



アイヌ古式舞踊ドイツ公演

アイヌ民族博物館と白老民族芸能保存会は、本年10月、ドイツ政府の招待により、同国においてアイヌ古式舞踊公演を行った。今回の公演は、ベルリン市にある「世界文化の家」が主催する伝統音楽祭「北の声 シャーマンのルート」への参加で、同音楽祭は10月3日から同22日まで開催され、我々16名は、16日と18日、ベルリン市とボン市において、それぞれアイヌ古式舞踊を披露した。

「世界文化の家」は、ドイツ政府とベルリン市が共同で運営している財団法人で、毎年、世界中のあらゆる分野の音楽をドイツに紹介しており、本年は「北の声 シャーマンのルート」と題して、北方民族を中心に、伝統文化を紹介している。公演者は、我々の他に、カナダ先住民（イヌイト）、シベリア北部のシャーマン、カムチャッカ、カザフ、アルタイ、韓国、モンゴル、ジャカルタの伝統文化継承者で、一日1民族（グループ）が公演を行い、伝統文化を披露した。

我々が公演を行った16日は、まず、ボン大学教授ウルシュレーガー博士による「アイヌの歴史と文化」と題しての講演があり、同氏によって、アイヌの歴史と文化が今日的状況を交えて紹介された。続いて、秋野茂樹が「アイヌ文化の現状」について、20分程度の解説を行った。なお、本解説はウルシュレーガー博士令夫人であるバーバラさんに通訳をお願いした。

次に、古式舞踊公演であるが、当初、16の演目を予定していたが、ドイツへの途次、エムシ等を入れた荷物がパリ・ドゴール空港で行方不明となり、公演で使用できなくなってしまったため、演目も少なくせざるを得なくなってしまった（その後、荷物は見つかり、無事、我々と一緒に白老に帰ってきた）。結局、ハンチカプリムセ他11の演目を披露したが、初めて見るアイヌ古式舞踊とあって、1曲終えるたびに、会場から盛んな拍手をいただいた。

18日のボン市における公演は、ベルリン同様、ウルシュレーガー博士の講演の後、11の

演目を披露した。

...

今回のドイツにおける公演は、荷物が行方不明になるなど、若干のトラブルに見舞われたが、ほぼ所期の予定どおり、両会場とも1時間あまりの公演を行うことができた。

周知のとおり、ドイツを中心とするヨーロッパは、早くからアイヌ文化に対する興味・関心が強く、現在、ヨーロッパ各地の博物館に収蔵されているアイヌ資料は約5700点を数える。そうした環境にあるドイツにおいて、アイヌ古式舞踊公演の機会を得たことは誠に意義深いものがある。

本公演がヨーロッパにおけるアイヌ文化周知の一助となれば幸いである。

（秋野茂樹）



会場の人たちとヤイサマを踊る（於：ベルリン）



公演を終えて（於：ベルリン）

「先住民国際フェスティバルin 白老」を開催して

本年10月9日・10日の2日間、白老町において標記フェスティバルを開催した。本フェスティバルは、「先住民の過去・現在・未来」のテーマのもと、参加先住民がシンポジウム・民族芸能祭を通して、文化伝承・保存を考えることを主旨としており、フィンランドのサーミ3名をはじめとして、世界6ヶ国から先住民79名が白老に集った。

本フェスティバルは、先住民国際フェスティバル実行委員会によって運営されたが、同委員会はアイヌ民族博物館職員及び北海道ウタリ協会白老支部会員を中心として、白老町民有志によって構成され、実行委員長に山丸和幸氏（アイヌ民族博物館館長）を頼み、事務局をアイヌ民族博物館に置いた。以下、日程を追って、「フェスティバル日記」を記してみたい。

10月7日 ナナイを除く先住民44名が来白。午後6時からリーダーミーティングを開き、フェスティバルの日程等について協議。

10月8日 各先住民代表、実行委員会委員とともに関係機関へ表敬訪問（訪問先：北海道庁、北海道ウタリ協会、アイヌ文化振興・研究推進機構、白老町役場）。午後6時、白老町コミュニティセンターを会場に歓迎レセプションを開催。フェスティバル参加先住民、関係者、白老町民が出席し、会食を共にして、交流をもった。

10月9日 午前中、参加先住民全員でアイヌ民族博物館訪問。午後、「フェスティバル」開幕。開会式の後、記念講演。台湾行政院原住民委員会副主任委員孫大川氏が、「先住民の過去・現在・未来」と題して、台湾における原住民政策の現状について話された。続いて、シンポジウム。テーマは、「先住民の過去・現在・未来 文化伝承を考える」。東京国立博物館資料部第二資料研究室長佐々木利和氏のコーディネートのもと、参加先住民代表がパネラーとして、自国における文化伝承の現状などを発表するとともに、意見交換が行われた。

10月10日 「民族芸能祭」開催。午前中、各先住民リハーサル。午後2時、開幕。台湾原

住民アミにはじまり、イヌイト、サーミ、クリーと伝統芸能を披露。最後に、全員でイヨマンテリムセを踊り、閉幕となった。

芸能祭終了後。アイヌ民族博物館内チセに会場を移して、「さよならパーティ」を開催。



表敬訪問：北海道庁



歓迎レセプション



記念講演：孫大川氏

歓迎会同様、フェスティバル参加先住民、関係者、白老町民が出席。芸能祭の盛り上がりの余韻のなか、別れを惜しみ、あるいは再会を約す光景が随所に見られた。

10月11日 先住民帰国。

...

今回のフェスティバルは、過去2度実施した同様のフェスティバルの成果を踏まえて実施されたものである。上述したように、文化の伝承・保存を考えることを主旨とし、併せて、白老町民をはじめとして広く道民と先住民との交流をもって、それぞれの持つ文化を理解し合うことに開催の意義を求めた。

幸いにして、4日間という短い期間ではあったが、本フェスティバルに集った人たちが、世界的な視野をもって、民族文化の重要性、あるいは文化伝承の必要性を認識されたものと思われる。

今回招聘した先住民の多くは、アイヌ民族博物館がこれまで行ってきた海外との交流において知り得た人たちであり、また、ナナイとは、北海道ウタリ協会白老支部をはじめとする白老町民有志が1994年から交流を続けている。こうした背景を持った今回の交流は、旧知ということもあって、終始和気藹藹としたものであった。なお、招聘した先住民は下記のとおりである。

- | | |
|----------------|-----|
| 1.サーミ：フィンランド | 3名 |
| 2.イヌイト：カナダ | 2名 |
| 3.クリー：カナダ | 1名 |
| 4.オジブウェイ：カナダ | 1名 |
| 5.ニヴフ：ロシア | 3名 |
| 6.ナナイ：ロシア | 10名 |
| 7.マオリ：ニュージーランド | 10名 |
| 8.アミ：台湾 | 24名 |
| 9.アイヌ | 25名 |

...

最後に、本フェスティバル開催に当たっては、白老町、白老町教育委員会、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、アイヌ民族博物館、白老民族芸能保存会、北海道ウタリ協会、北海道ウタリ協会白老支部、白老町国際交流グループ「SINCE'98」をはじめとして、多くの関係各位に多大なるご支援ご協力を賜った。記して、感謝の意としたい。

秋野茂樹（実行委員会事務局）



シンポジウム



民族芸能祭：クリーの踊りに先住民が加わる



民族芸能祭：全員でイヨマンテリムセ



さよならパーティ

ロシア国立民族学博物館における資料調査 2

荻原眞子千葉大学教授を研究代表とするプロジェクト「在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究」が実施した、ロシアのサンクトペテルブルグにおけるアイヌ民具資料調査は、今年度調査をもって一応の終了をみた。

1995～1996年の2カ年で、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館が収蔵する約1,400点、1997～1999年の3カ年でロシア国立民族学博物館が収蔵する約2,700点¹⁾のアイヌ民具資料の調査をおこなった。

今年度は、ロシア国立民族学博物館での調査の最終年ということで、総括的な調査がおこなわれた。調査期間は、7月31日～8月22日までの3週間で、信仰用具、漆器、鉢、狩猟具、漁労具、織機、楽器、莫座、編袋など大小さまざまな資料の調査を新たにおこない、また、写真資料の複写及び前2年間の資料の補足調査、再撮影、台帳の再チェックも並行して進められた。

ロシア国立民族学博物館のアイヌ民具資料は、100年近い歳月を収蔵庫の棚の中で眠り続けた分²⁾、その上に蓄積されたほこりもかなりのものがあつたが、日本国内では殆ど見ることのできない資料が収蔵されている。今年度調査した資料のなかでは、イラクサを2本燃りあわせた経糸401本を使用した織りかけの機織具一式は、保存状態も良く、実際にイラクサを織る際の標本となりえるものや、シナノキを染めた皮で文様を入れた莫座は、幅150cm、長さ500cm以上と非常に大きく、編糸である経糸本数を途中で増減させることで編文様に変化を加えている手の込んだものがある。また、径12cm、長さ100cmほどの丸太12本を組立てる実物資料の熊檻や、棒9本を縫ぎ足した滑走鋸の柄の長さが25m以上もあるものなど大型の資料が数多く含まれていた。

3年間におよんだロシア国立民族学博物館での調査における膨大な資料データ及び写真資料は、現在、千葉大学と北海道立アイヌ民族文化研究センターを中心に整理作業が進められている。このプロジェクトで、ロシア、サンクトペ

テルブルグ市内におけるアイヌ民具資料は約4,000点以上にのぼることが明らかとなり、日本国内においてもこのようにまとまった資料数を収蔵する施設は数少ない。この調査に参加できたことで、改めて、諸外国に収蔵されているアイヌ資料の多さに驚きを感じるとともに、同資料が生活、信仰などアイヌ文化全般に及んでいることから、如何にアイヌへの関心を強く抱いていたかを実感した。

1) ロシア国立民族学博物館が収蔵するアイヌ民具資料は、1868～1932年に収集されたもので、1912～1913年にワシーリエフがサハリンや北海道で収集した資料を中心に、ポーランドの民族学者プロニスワフ・ビウスツキが沙流門別で収集した資料など、収蔵番号で2,069点、枝番号を数えると約2,700点にのぼる。

2) ロシア国立民族学博物館には、アイヌ資料を専門に扱う職員がいないことからアイヌに関する常設展示がなく、資料台帳の整理、確認等以外での資料の取り扱いがない。そのため、収蔵されてからの年月を外部の目にふれることなく、収蔵庫で眠り続けていた。ちなみに、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館では、常設展示としてアイヌ資料の一部が公開されている。

【1999年度在ペテルブルグアイヌ資料調査参加者】

荻原 眞子	千葉大学
佐々木利和	東京国立博物館
古原 敏弘	北海道立アイヌ民族文化研究センター
鈴木 邦輝	名寄市北国博物館
吉田 睦	千葉大学
藪中 剛司	静内町郷土館
田村 将人	千葉大学(学生)
小川久美子	モスクワ大学(学生)
村木 美幸	アイヌ民族博物館

(村木美幸)

第11回しらおいチェブ祭の開催について

9月26日(日)白老港インカルミナル前広場において、第11回「しらおいチェブ祭」が開催された。主催は、北海道ウタリ協会白老支部を中心に組織された「しらおいチェブ祭実行委員会」(山田國雄実行委員長)である。

かつてのアイヌ社会にとって、サケは生活基盤を支える重要な食料であったことは言うまでもない。その重要性は、口承文芸などの伝承として、また、さまざまな歴史・民族資料に記されている。アイヌとして、サケ漁ができなくなったいま、アイヌのサケ利用文化は、その重要性を失ってしまったのか……。

- サケ儀礼の復活

第1回しらおいチェブ祭が開催された1989(平成1)年は、アイヌ自身が、さまざまな文化復興活動を積極的に推し進めた年でもある。ちょうど同じ時期に、北海道ウタリ協会主催の「第1回アイヌ民族文化祭」が札幌市で開催され、東京では、初めて「アイヌ語弁論大会」が開催された。また、世界の先住民との交流や先住民問題を取り上げた新たな動きとして、ヤイユーカラの森が主催した「世界先住民民族会議」が開催されている。この年、日本政府は「ウタリ問題検討委員会」を設置した。

このようなアイヌを取り巻く社会的な動きに連動して、北海道ウタリ協会白老支部の青年部が中心となり「第一回しらおいチェブ祭」が開催された。



しらおいチェブ祭

白老アイヌの伝統的なサケ利用文化の伝承と、町民に対しての啓発活動を目的に「祭り」として復活したサケ儀礼について報告する。

- 白老アイヌのサケ漁

白老におけるサケ漁については、犬飼哲夫による詳細な記録[犬飼 1954:79-90]により、他の地域より複雑なサケ漁に関する行事が報告されている。サケが遡上する前に河口付近で「ペッカムイノミ」(前漁儀礼)を行い豊漁を祈願する。漁期が近づくと川縁のニガキヤニワトコといった匂いのきつい木を取り除き、川が濁らないよう注意をする。女性は川での洗濯や渡ることを禁じられる。特に、出産を迎えた家では、産後、子供の臍の緒が切れるまで、主人は漁に出ることが許されない。

このように様々なタブーにより、白老のサケ漁が行われていた。また、知里真志保によると、白老アイヌのサケの名称は、一般の魚を指すチエブ(chiep)とは言わず、チェブ(chep)と厳重にサケに限る名称としてを使い分けている[知里 1959:245-265]。このことから白老アイヌのサケ資源の重要性をうかがい知ることができる。



マレクによるサケ漁(昭和初期)

- 復活したサケ儀礼

では、現代に復活したサケ儀礼は、この伝統をどこまで蘇らせているのだろうか、当然、昔とは違うことを前提にしてである。

この儀礼は、当館の復元展示家屋ポロチセにおいて、事前に制作しておいた用具類の確認と

共に、アペフチカムイ（火の神様）に、チェブ祭の開催と、その守護をお願いするカムイノミ（神への祈り）から始まった。祭司は、新井田幹夫（伝承課係長）が務めた。

儀礼会場となったウヨロ川は、白老港の東に位置し、毎年、多くのサケが遡上する二級河川である。上流にはサケ・マスふ化場があり、下流域にあるこの会場からも、白老漁協が管理する人工ふ化のための捕獲場が見える。

まず、儀礼を行うにあたり、地形と方位関係を考慮し、ヌサ（祭壇）とアペフチカムイの位置を決める。そして、ササとヨモギを束ねたタクサ（手草）を持ち、「フッサ、フッサ」と言いながら、ヌサが設置される上座の方から下座にかけて、その場所を清める「フッサカラ」（おはらい）が行われた。

次に、火入れを行い用具類を配置し、初漁のサケが供えられた。その上座の方に、イナウ（木幣）を立てヌサが作られた。

ヌサのイナウは、向かって左から次の通りとした。

トマリオルンカムイ（入江の神）

チワシコロカムイ（波立ちの神）

ペップトゥンカムイ（川下の神）

ペトクンカムイ（川上の神）

ケマコシネカムイ（キツネの神）

以上、準備がすべて整ったところで、祭司を務める新井田幹夫が、「オンカミアンナー」と礼拝の指示を出し、参席した男性全員により「オンカミ」（礼拝）を行い儀式が始まった。



ウヨロ川でのカムイノミ

祭司は、カムイ（神様）の恵みであるサケが、沢山川に上るようにアペフチカムイに祈り、これから行われる祭りの守護をお願いした。

祭司のカムイノミが続くなか、ヌサに祀られた神々を担当した者が、それぞれ受け持ったカムイに対して、祈りを捧げた。その後、主催者の代表を先頭に、参席者による祈願が行われ「第11回しらおいチェブ祭」が開幕した。

このように復活したサケ儀礼は、前漁儀礼と初漁のサケを迎える初漁儀礼を合わせ持った形態で行われた。



伝統料理コーナー

- サケ利用文化

引き続き、ウヨロ川で、丸木舟を使ったマレク（突き鉤）での伝統的なサケ漁も再現された。

祭り会場では、様々な露店が立ち並び、祭りの雰囲気盛り上げている。

チマチェブ（サケの串焼き）やチェブオハウ（サケ汁）などの伝統料理の販売のほか、伝統工芸のサラニブ（編み袋）やムックリの製作体験コーナーが設けられている。これにより、多くの町民がアイヌとサケの伝統的な関わりを知ることができる。しかし、ここに集まる人々の目的は、祭りの雰囲気を味わうことと、サケやその他の特産物を安く買うことである。一方、この祭りを主催した白老支部もまた、アイヌの伝統的なサケ利用文化との関わりにより、独占的にサケを売ることができる。

現在、道内の5地域でサケ儀礼が行われている。これらの儀礼の背景には、伝統的にサケを利用してアイヌ文化を継承し、その理解を促進しようとするアイヌの意思がある。

さらにサケ儀礼を行うことにより、アイヌ間の連帯感や民族としての意識の高まりを目指している。アイヌのサケ利用文化が時代とともに変容して、現在に継承され、新たな意味を持つようになっている。

（野本正博）

新収蔵資料紹介

資料名：樹皮衣（アイヌ語名：アットウシ attus）

収蔵年月日：平成11年10月13日

収集年：昭和50年代前半

収集地：平取町二風谷 収集者：戸田実津男

収集先：貝澤ハギ 製作者：貝澤ハギ

製作年：不明

計測値：総丈	134.5cm	着丈	129.5cm
裾	63.0cm	裾周	118.5cm
前幅	30.0cm	後幅	29.0cm
袖幅	33.5cm	袖丈	30.5cm
袖口	23.5cm	衿高	8.0cm

資料解説

オヒョウ製の晴れ着。

地布は、緯糸にオヒョウ、経糸にはオヒョウを主に黒色と緑色の木綿糸を使用している。経糸の数は212本で、だいたい等間隔で木綿糸を4本ずつ8列入れ、縞を織り込んでいる。木綿糸は、黒色と緑色では黒色の方が細く、2本を一組として、縞の太さを調整している。この着物に使用した布の長さは約640cmである。

仕立ては、長襦袢と同様におくみがなく、背縫い、脇縫いとも縫いしろを取り、二度縫いして縫い目が開かないようにしている。衿は、衿肩明きにアットウシの端布を付け、掛衿風に全体を紺木綿布で覆っている。袖は筒袖。

文様は、衿、裾、袖口に紺木綿布を置き、その上から木綿糸（水色、白、黄色、赤の4色）で刺繍が施されている。刺繍は、中央に白、その両脇に水色の3本のチェーンステッチを主と



し、文様が交差し連なる部分などに、赤や黄色で菱形にポイント刺繍が施されている。アイヌ衣服の晴れ着の多くは、胸、背、袖口、裾周りに文様が施され、特に、背と裾周りに目を引く文様が多いが、この資料には背の部分に文様がないのが特徴的である。

収蔵の経緯

収集者の戸田氏は、昭和50年頃、白老町のポロト地区で民芸品店を営んでおり、民芸品の買い付けなどにしばしば平取町二風谷へ足を運び、製作者である貝澤ハギ氏からもいろいろな工芸品を仕入れていた。中でもこのアットウシは、貝澤氏から「これは、オヒョウ製で、自分は年を取ってしまって、もう織ることができない。自分の最後の作品だから。」といわれ購入したという。

戸田氏は、民芸品店を閉めてからも、このアットウシだけは手放さず、今日までタンスにしまい込んでいたが、「博物館の資料の一つ」と、当館に収蔵されることになった。

製作者について

貝澤ハギ氏は、明治45年、平取の平村家に生まれ、二風谷の貝澤勲太郎氏に嫁いだ。ハギ氏は、姉である貝澤みさを氏と同様に、アットウシ織りやゴザ編みなどアイヌの伝統的な手工芸の製作に優れ、当館の児玉マリ（アイヌの服飾研究家）もアットウシの織り方について手ほどきを受けたという。

札幌に在住していた昭和28年頃には、アットウシの反物の販売ルートを開き、また、旭川の大手民芸品卸業者などへアイヌ民芸品の販売網を広げた。昭和44年10月に、二風谷に「アツシ織生産組合」が設立されると副組合長に就任し、自らも民芸品店を営み、手工芸品の販売をおこなっていた。

参考文献

- ・二風谷部落誌編纂委員会編『二風谷』二風谷自治会 1983
- ・『エカシとフチ』編集委員会「資料編 文献上のエカシとフチ」『エカシとフチ』札幌テレビ放送株式会社 1983
- ・上田満男『わたしの北海道』すずさわ書店 1977
- ・児玉作左衛門・伊藤昌一「アイヌ服飾の調査」『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会 1968

（村木美幸）

博物館短信

平成11年度アイヌ文化教室

第2回アイヌ文化教室 / アイヌ文化講演会

テーマ：「アイヌの女たち」

日時：8月28日（土）18：00～20：00

会場：アイヌ民族博物館映像展示室

講師：萩中美枝（日本口承文芸学会会員）

受講者：48名

* アイヌ女性の通過儀礼について、フチキリ（母系の系列）との結びつきなどを例に解説。アイヌ文化における女性の役割を学んだ。

第3回アイヌ文化教室 / アイヌ文芸講座

テーマ：「口承文芸のタベ」

日時：10月2日（土）18：00～20：00

会場：アイヌ民族博物館ポロチセ

話者：上田トシ・黒川セツ（平取町在住伝承者）

解説：本田優子（当館特別学芸員）

受講者：100名

* 二部構成とし、第一部は一般受講者に加え、北海道PTA連合会主催事業「白老町ファミリームーブメント」の小中学生ら47名も参加。上田トシ氏の昔話2編（「サル的心脏」「ぬかおにぎり」）を鑑賞し、本田優子が和訳するとともに、本州などに伝わる類話との比較を行った。また、事前に物語のキーワードとなるアイヌ語の単語資料が配布され、アイヌ語の聞き取りをゲーム感覚で楽しんだ。第二部は「昭和初期のコタンやエカシの思い出」と題し、黒川セツ氏自身の体験から、発疹チフスにより身内を失い、自らも死にかけた話などを語っていただいた。



左から、本田優子、上田トシ、黒川セツの各氏

古式舞踊公演（白老民族芸能保存会事業）

西暦2000年世界民族芸能祭「ワッショイ！2000塾」

期日：9月18日

会場：堺市立泉ヶ丘図書館ホール

主催：西暦2000年世界民族芸能祭組織委員会

出演者：19名

第12回アイヌ民族文化祭

期日：11月28日

会場：千歳市民文化センター

主催：社団法人北海道ウタリ協会

出演者：18名

国際交流事業

先住民国際フェスティバルin白老

期日：10月9日・10日

会場：白老町コミュニティセンター講堂

主催：先住民国際フェスティバル実行委員会

参加者：79名（6カ国9民族）

* 10月9日、当館見学に続いて「先住民の過去・現在・未来」をテーマにシンポジウムを開催。翌10日には民族芸能祭、同日夜には当館ポロチセを会場に交流会が催された。（詳細は3-4頁）

伝統音楽祭「北の声 シャーマンのルート」

主催：世界文化の家（ベルリン）

期日：10月16日、18日

開催地：ドイツ（ベルリン市・ボン市）

出演者：16名（詳細は6頁）

台湾原住民委員会表敬訪問 / アミ・タイヤル族との交流

期間：11月21日～11月25日

場所：台湾（台北市）

参加者：アイヌ民族博物館職員16名

台湾パイワン族との交流会

期日：11月29日

場所：アイヌ民族博物館1号チセ

* 北海道ウタリ協会主催「第12回アイヌ民族文化祭」に参加のため来道した台湾パイワン族15名を当館に招待し、交流会を実施した。

新収蔵資料

10月10日、先住民国際フェスティバル参加民族から資料14点を受贈。

杵（台湾・アミ）／CD・小物入れ等（フィンランド・サーミ）／絵はがき・壁かけ（ロシア・ナナイ）／耳あて・手甲・お守りの木偶（ロシア・ニヴフ）……計14点

10月13日、戸田美津男氏（白老町高砂町在住）より、アットウシ（オヒョウ製）1点を購入。（詳細は7頁）

11月24日、台湾において二宮一朗氏より、口琴1点（台湾・タイヤル族）を受贈。

11月29日、台湾パイワン族より、つぼ1点、肩かけ1点を受贈。

儀礼の実施

8月17日、シンヌラッパ（祖先供養祭）

9月26日、ペッカムイノミ（鮭の豊漁祈願祭）

* しらおいチェブ祭実行委員会主催事業「第11回しらおいチェブ祭」の一環として実施。なお、同祭では、アイヌ文化体験として、伝統漁法マレク漁、ムックリ製作体験、古式舞踊体験などが実施された。

学芸員実習受入

期 間：9月6日～12日

4名の博物館実習生を受け入れ、当館学芸員が衣服の計測や当館が収蔵するイクパスイ（捧酒箸）の整理などを指導した。

白老町ファミリームーブメント宿泊研修

期 日：10月2日・3日

参加者：47名

* 北海道PTA連合会主催による特別事業。町内の小中学生、父母、教師らが、当館ポロチセを主会場に宿泊研修を行った。一日目は伝統料理の体験に続き、夜には同日開催の第3回アイヌ文化教室に参加し、アイヌの口承文芸を鑑賞し、チセに宿泊。二日目は古式舞踊、ムックリ演奏を体験した。

職員派遣

第2次在サントペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究

期 間：7月30日～8月30日

* 千葉大学文学部荻原真子氏を研究代表者とする標記研究の現地調査に、村木美幸学芸員が参加した。（詳細は5頁）

平成11年度普及啓発セミナー

期 日：8月24日・25日

* 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構主催の標記セミナー講師として、野本正博学芸員補を派遣した。

受賞

平成11年度アイヌ文化奨励賞

（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構）

受賞者：野本リヨ（当館伝承課伝承顧問）

受賞理由：1965年の「ポロトコタン」開設

当初からアイヌの有形・無形文化全般にわたる指導者として後進を指導。文化伝承者だった母から受け継いだ古式舞踊をはじめ衣服、伝統料理の製作など女性の手仕事の技術の伝承・保存に尽力した。

平成11年度白老町文化奨励賞（白老町）

受賞者：上河ハツエ（当館伝承課職員）

受賞理由：アイヌ古式舞踊の伝承者として文化の保存と後継者の育成に貢献。



上河ハツエ、野本リヨの両氏
（10月31日、当館1号チセにおける祝賀会にて）

アイヌ民族博物館だより No.43

発行：財団法人アイヌ民族博物館
〒059-0902 北海道白老町若草町2丁目3-4
TEL：0144-82-3914
FAX：0144-82-3685

THE AINU MUSEUM 1999. 11. 30

印刷：株式会社北海道機関紙印刷所
〒006-0806 札幌市北区北6条西7丁目
TEL：011-716-6141
FAX：011-717-5431